

歴史の文差点

富士通FSC特別顧問 山内昌之



頼山陽の『日本外史』（岩波文庫）は、司馬遼太郎の小説と『日本外史』が幕末勤王の志士に影を与えた反徳川・反幕府の書物だという点にある。これは正史の事実にくわらず、山陽は『坂の上の雲』のように人物を言の4は、わざわざ「我が徳

「日本外史」の誤読

芸術的に脚色したわけではなく、たゞ、双方の叙述に共通するのは、どの時代の内乱や戦争をとりあげても、人びとの平和に対する希求を大切にしている点なのだ。

た。源平このかた平和の時期が少なく兵乱が多かった歴史に終止符を打った徳川家康の功業を高く評価したのである。

果たして、これで歴史を正しく理解できるのかという疑問がすぐに湧く。徳川家康と江戸幕府の平和統治を学ばないだけで、天下を「民」の天下と考へる山陽と、「一人」（天皇）の天下と信じる松陰の違いは、これまでも指摘されてきた。そのうえ、「人命至重」を主張し海外膨張を否定した山陽に松陰は激しく反発した。「純粹」な信念に由来する過激な行動を是認する松陰と、政治の結果責任を重んじる山陽はあまりにも異質だった（濱野氏）。

私が松陰で気になるのは、歴史家における「ヘロドトスの悪意」のいくつかに陥っていること（やまつち まさゆき）

『外史』を素直に読めば、頼山陽が倒幕思想家でないことはすぐに分かる。しかし、書物の

とだ。プルタルコスという「ヘロドトスの悪意」の第3とは、「立派なこと、賞讃に値することを省略」することである（『モラリア』10）。家康や徳川氏の200年以上の平和の果実を無視し、時代を超越して「楠氏」（正成）の忠誠や悲運に慷慨する講義では、いきおい自分を正成に擬え、徳川の平和と繁栄の意味を理解しない塾生を育てることにならないか。高杉晋作はじめ松陰門下生たちが何かと幕府の営みに「難癖」をつけ、その失敗を喜んだのは、『外史』の誤読による不公平な歴史評価と無縁だったはずがない。